

新型コロナウイルスパンデミックの定期健診結果への影響調査 VOL. 1(生活習慣等)

一般財団法人近畿健康管理センター

【背景・目的】

新型コロナウイルスパンデミック下、2020年以降、感染防止のためのフィジカル・ディスタンス、外出制限・自粛、経済活動の制限は人々の働き方や生活に大きな影響を与えている。そこで、働き方や生活の大きな変化による、生活習慣や自覚症状への影響を調査・可視化し、対応が必要な健康課題の有無をあきらかにすることを目的とした。

【方法】

一般財団法人近畿健康管理センター(以下、KKC)で2018年度、2019年度、2020年度にわたって連続受診された健診受診者の匿名化された問診情報を調査し・年度ごとの比較を行った。※倫理的配慮:本研究は、KKCにおける倫理委員会の承認を得て実施した。(承認番号 2021-002)

【結果・考察】

新型コロナウイルスパンデミックによる影響では、2020年度、全体で、遅い夕食摂取者が減少し、睡眠で休養できている者が増加し、喫煙者の減少が進んだことがうかがわれた。飲酒は、「飲まない」者の割合が増加した。「飲みニケーション」機会の減少が推測された。一方で、2019年から「毎日飲む」者は増加継続していた。「ウチ飲み」が常習飲酒家や大酒家増加につながらないよう留意が必要である。男性は、2019年の働き方改革による労働時間減少が、食習慣改善や運動習慣づくりの契機となったことが、運動習慣者の増加や朝食抜き受診者の減少傾向からうかがえた。女性は2020年に運動習慣者増加がみられず、朝食抜き者と喫煙者の有意な減少がみられなかった。自覚症状は、2019年から継続して「なかなか眠れない」が増加傾向であった。外出自粛等による受診者への精神面への影響に留意する必要がある。女性では「不安感」「ゆううつ」が有意差はないが増加傾向であり、新型コロナウイルスパンデミックによる女性への影響調査をさらにすすめる必要がある。